〔論　文〕

家族機能性（凝集性・適応性）と家族のルール

Family functioning and family rules of female junior college students

柴　田　雄　企
Shibata Yuki

ABSTRACT

The purpose of this study is to investigate the relationship between family functioning (family cohesion and family adaptability) and family rules. Participants were 143 female junior college students. They answered questionnaires regarding family functioning and family rules. They answered regarding their family rules when they were elementary school students, junior high school students, high school students, and junior college students. The results show, (1) The number of family rules tends to have decreased as they aged, and (2) There is a relationship between the type of family cohesion and the number of family rules. “Connected” and “enmeshed” type of families have more family rules than “separated” type of families, while there is no relationship between the type of family adaptability and the number of family rules.

Key words: family cohesion, family adaptability, family rules,
female junior college students

問題と目的

社会集団の中にはルールが存在し、社会を構成する最小単位と言われる家族の中にもルールが存在することが多い。家族のルールは、家族が安定状態を保って継続していくことに寄与し、子どもが社会に出る際に求められるルールや、その大切さを学ぶために必要なものと考えられる。

筆者は、学童期以降は、子どもの年齢が上がるにつれて家族のルールは減少していくのではないかと考える。なぜなら、児童期は、まだ社会化の途中であり、判断能力が不十分なので、家族の中で多くのルールが必要と考えられるからである。しかし、小学生から中学生、高校生、大学生と年齢が上がるにつれ、社会のルールを身につけ、自分で判断することができるようになるだろう。幼い頃にあったルールの中には必要ではなくなるものもあると考えられる。本研究では、家族のルールの数が小学生から短大生までの間にどのように変化するのかを調査することを目的とする。

また、新たな家族を築いた際、自分が子どもの頃にあったルールや、現在の自分の家族のルールを基にして、将来の家族のルールを設けるのではないかと考えられる。そこで、自分が生殖家族を築いた時に、自分の定位家族に存在していたルールを活用する意思があるかについても調査することにした。

さらに、本研究では、家族機能性（家族凝集性、家族適応性）と家族のルールの関連について検討する。家族凝集性とは、家族メンバーを結びつける情緒的親密さをあらわす概念であり、家族適応性とは、家族システムの勢力構造や役割関係を状況や危機に応じて変化させる能力をあらわす概念である。

方法

短期大学生を対象に質問紙調査を3回にわたって実施した。分析対象は短期大学女子学生143名（平均年齢は18.82才）。第1回調査は2013年11月に実施した（57名）。第2回調査は2015年1月に実施し（45名）、第3回調査は2016年1月に実施した（41名）。

質問紙の内容は以下の通りである。

１．基本属性

年齢、性別。

２．家族のルール

(1)家族のルール

自分の家庭内で、小学校、中学校、高校、短期大学のそれぞれの時期に、以下の項目のルールがあったかを尋ねた。項目は筆者が設けた。

①お風呂の順番が決まっている。②挨拶をする（行ってきますやただいまなど）。③外泊は禁止。④家事の役割分担が決まっている。⑤テレビをつけっぱなしで寝てはいけない。⑥ご飯を食べながらテレビを見てはいけない。⑦食事のとき座る席が決まっている。⑧食事のとき使うお箸やお茶碗が決まっている。⑨帰宅したとき靴を脱いだらそろえる。⑩出かけるときは家族の誰かに行き先を伝える。⑪家の中で使ったものは元あった場所に戻す。⑫門限が決まっている。⑬テレビゲームをする時間が決まっている。⑭携帯を使う時間が決まっている。⑮子どもの就寝時間が決まっている。⑯子どもは休日の１日にテレビを見る時間が決まっている。

(2)将来の家族のルールについて

自分が将来、家庭を持った時に上記のルールを活用したいか尋ねた。また、活用したい場合は、その理由について記入してもらった。

(3)その他の家族のルール

自分の家庭で、上記の項目以外のルールがあった場合には、そのルールの内容について記入してもらった。

３．家族機能測定尺度

凝集性と適応性を測るため、草田・岡堂（1993）が、オルソンら（1985）のFACESⅢを和訳して作成した家族機能測定尺度（日本語版FACES）を用いた。これは、凝集性尺度10項目（「私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める」、「私の家族は、みんなで何かをするのが好きである」など）と、適応性尺度10項目（「私の家族では、問題の性

質に応じて、その取り組み方を変えている」、「家族の決まりは、必要に応じて変わる」など）の計20項目から成る。

評定は5件法で求めた（「まったくない（1)」、「たまにある（2)」、「ときどきある（3)」、「よくある（4)」、「いつもある（5)」)。20項目のうち2項目は逆転項目となっている。

この尺度では、凝集性と適応性の2つの次元において、ともに極端な値をとらない時に、家族機能の健康度が高いと評定される、カーブリニア性を仮定している（鈴木・小川，2000)。

結果

１．家族のルール

(1)各年代の家族のルール

自分の家庭内でルールがあったかどうか年代別に質問した結果を表1に示した。対象者のうち半数以上の者があったと回答した（50%以上）の箇所に網掛けをした。

小学校、中学校、高校、短期大学（調査時点）の間で、家族のルールの数を比較したところ、年代が上がるのにしたがって、ルールの数は減少していた（表2）。

(2)将来、活用したいルール

表1の一番右の将来の欄に、そのルールを活用したいと回答した者の人数と割合を示した。将来、ルールを活用したい理由としては以下のものがあった（複数回答者あり)。「健康のため」（子どもの健康状態に悪影響を与える可能性があると思ったので等）というものが15名、「当たり前だから」(自分がずっとやってきて、当たり前のことだと思うから等）というものが14名、「安全のため」(子どもの安全面に気をつけたいから等）というものが12名、「大切なことだから」(あいさつは大切だから等）というものが11名、「規則正しい生活のため」というものが5名、その他39名であった。

(3)その他の家族のルール

その他の家族ルールとしては、「食事の時は話さない」、「毎週木曜の夜は寄せ鍋」、「父が仕事に行く時は、みんな1回ずつ父の手にタッチする」、「うそはつかない」、「家族内でもお金の貸し借りは禁止」、「ありがとう、ごめんなさいは必ず言うようにする」「携帯、ゲームは22時以降使用禁止」、「小学生は22時以降のドラマを見てはいけない」、「髪を染めない。ピアスを開けない」、「携帯は高校生から。携帯を自分の部屋に持って入ってはいけない（高2まで)」、「テレビを見れる権利、録画ができる権利は母親と妹が優先で、父と弟がその次、自分なし」というものがあった。

表１　各年代での家族のルールがあった人数と割合（%）

項目	小学校	中学校	高校	短大	将来
1.お風呂の順番が決まっている。	27 (18.9)	23 (16.1)	20 (14.0)	22 (15.4)	3 (2.1)
2.挨拶をする（行ってきますやただいまなど）。	115 (80.4)	113 (79.0)	106 (74.1)	102 (71.3)	115 (80.4)
3.外泊は禁止。	55 (38.5)	43 (30.1)	25 (17.5)	8 (5.6)	4 (2.8)
4.家事の役割分担が決まっている。	39 (27.3)	41 (28.7)	35 (24.5)	31 (21.7)	36 (25.2)
5.テレビをつけっぱなしで寝てはいけない。	95 (66.4)	95 (66.4)	94 (65.7)	94 (65.7)	95 (66.4)
6.ご飯を食べながらテレビを見てはいけない。	21 (14.7)	7 (4.9)	4 (2.8)	1 (0.7)	0 (0.0)
7.食事のとき座る席が決まっている。	109 (76.2)	106 (74.1)	105 (73.4)	94 (65.7)	59 (41.3)
8.食事のとき使うお箸やお茶碗が決まっている。	109 (76.2)	105 (73.4)	105 (73.4)	98 (68.5)	81 (56.6)
9.帰宅したとき靴を脱いだらそろえる。	100 (69.9)	93 (65.0)	86 (60.1)	86 (60.1)	96 (67.1)
10. 出かけるときは家族の誰かに行き先を伝える。	126 (88.1)	118 (82.5)	99 (69.2)	73 (51.0)	85 (59.4)
11.家の中で使ったものは元あった場所に戻す。	92 (64.3)	84 (58.7)	80 (55.9)	76 (53.1)	91 (63.6)
12.門限が決まっている。	121 (84.6)	95 (66.4)	84 (58.7)	49 (34.3)	72 (50.3)
13.テレビゲームをする時間が決まっている。	61 (42.7)	34 (23.8)	17 (11.9)	10 (7.0)	52 (36.4)
14.携帯を使う時間が決まっている。	7 (4.9)	10 (7.0)	12 (8.4)	10 (7.0)	18 (12.6)
15.子どもの就寝時間が決まっている。	88 (61.5)	42 (29.4)	18 (12.6)	11 (7.7)	42 (29.4)
16.子どもは休日の 1 日にテレビを見る時間が決まっている	16 (11.2)	10 (7.0)	8 (5.6)	7 (4.9)	12 (8.4)

表２　各年代のルールの数

	小学校	中学校	高校	短大
ルールの数	8.26 (3.11)	7.13 (3.02)	6.38 (2.76)	5.40 (2.42)

２．家族機能性とルール

短大生（現在）の家族ルールの数を家族機能性（凝集性、適応性）によって比較した。

(1)家族凝集性と家族のルール

家族凝集性は、日本語版FACESでは遊離（10-24）、分離（25-31）、結合（32-38）、膠着（39-50）の4つに分類されており、分離と結合はバランス群、遊離と膠着は極端群とされている。家族凝集性の得点によって、対象者を上記の４つの群に分け、現在（短大）の家族のルールの数を比較した（表3）。結果、分離より結合の方が、また、分離より膠着の方がルールの数が多かった。

表３　家族凝集性と各年代の家族のルールの数

	遊離 (n=26)	分離 (n=42)	結合 (n=44)	膠着 (n=31)	F 値	多重比較
現在 (短大)	5.04 (2.22)	4.36 (2.49)	6.07 (2.24)	6.16 (2.27)	5.39**	分離＜結合* 分離＜膠着*

** p < .01, * p < .05

家族ルールの項目ごとに4群を比較した結果、「挨拶をする（行ってきますやただいまなど）」、「出かけるときは家族の誰かに行き先を伝える」、「家の中で使ったものは元あった場所に戻す」において有意差がみられた（表4）。

表４　家族凝集性による比較で有意差のみられた家族のルール

	遊離 (n=26)	分離 (n=42)	結合 (n=44)	膠着 (n=31)	F 値	多重比較
挨拶をする	0.62 (0.50)	0.52 (0.51)	0.82 (0.39)	0.90 (0.30)	6.01**	分離＜結合* 分離＜膠着**
行き先を伝える	0.35 (0.49)	0.31 (0.47)	0.68 (0.47)	0.68 (0.48)	6.77**	遊離＜結合* 遊離＜膠着* 分離＜結合** 分離＜膠着**
ものを元に戻す	0.50 (0.51)	0.33 (0.48)	0.68 (0.47)	0.61 (0.50)	4.07**	分離＜結合**

** p < .01, * p < .05

(2)家族適応性と家族のルール

家族適応性は、日本語版FACESでは、硬直（10-23）、構造化（24-28）、柔軟（29-34）、無秩序（35-50）の4つに分類されており、構造化と柔軟はバランス群で、硬直と無秩序は極端群とされている。適応性の得点によって、対象者を上記の４群に分け、現在（短大）の家族のルールの数を比較したところ、有意差は見られなかった（表5）。また、家族ルールの項目ごとに4群を比較したところ、いずれの項目においても有意差はみられなかった。

表５　家族適応性と各年代の家族のルールの数

	硬直 (n=28)	構造化 (n=44)	柔軟 (n=40)	無秩序 (n=31)	F 値
現在 （短大）	5.14 (2.40)	5.09 (2.50)	5.33 (2.41)	6.16 (2.28)	1.39

考察

１．家族のルール

(1)家族ルールの小学生から短大生までの変化

結果から、本研究で用いた家族のルール16個のうち、6個のルール(表1の項目3, 6, 10, 12, 13, 15)は、年齢が上がるにつれ、そのルールがあったという者が減少していた。また、各年代であまり変化の見られなかったルールもあった(表1の項目1, 2, 4, 5, 7, 8, 9, 11, 14, 16)。

年齢が上がるにつれて、減少していくものと、そうでないものがあることが示唆された。年齢が上がるにつれて減少していたルールのうち、「ご飯を食べながらテレビを見てはいけない」というルールは小学校の段階から、このルールがあった者が少なく、年齢が上がるとほとんどなくなっていた。「外泊は禁止」、「出かけるときは家族の誰かに行き先を伝える」、「門限が決まっている」、「テレビゲームをする時間が決まっている」、「子どもの就寝時間が決まっている」というルールが減少していたのは、子どもの生活時間についての裁量の度合いが高まっていったためと考えられる。

年代の上昇と関連の見られなかったルールのうち、表1の項目1, 2, 4, 5, 7, 8, 9, 11は、どの年齢の者にも当てはまる生活習慣であるためと考えられる。表1の項目14, 16は、小学校の段階からルールがあったという者が少なく、年齢が上がっても少ないままであった。

(2)将来の家族ルールについての意識

将来、ルールを活用したいと回答した者の人数については、小学校から短大までにそのルールがあったという人数と同程度であった。違いがみられたルールは、「お風呂の順番が決まっている」、「食事のとき座る席が決まっている」、「門限が決まっている」であった。お風呂の順番と食事の席順については、そのルールはあったけれども、将来はなくてよいと考えている者もいるという結果で、門限については、調査時点（短大）ではなく

なっているという者も将来は設定したいという結果であった。

２．家族機能性と家族のルール

本研究では、調査時点の家族のルールと家族機能性との関連を検討した。結果より、家族凝集性と家族のルールには関連がみられたが、家族適応性と家族のルールとの間には関連はみられなかった。また、家族凝集性が強い方が、家族のルールの数が多かった。家族凝集性との関連を各ルールについて検討したところ、「挨拶をする」、「出かける時は家族の誰かに行き先を伝える」、「家の中で使ったものは元あった場所に戻す」において、家族凝集性との関連が示され、家族凝集性が高い方が、これらのルールを設定している傾向がみられた。

インターネット利用についての家庭の取り組みについての千葉ら（2014）の研究では、家族凝集性に関する3つの質問項目を用いて、子どものネット利用リスクとの関係を分析している。千葉ら（2014）は結果から、家族凝集性の高さとネット利用に関する家庭内の約束の数および対策の数に、それぞれ正の相関があったことを報告している。本研究では、ネット利用以外のルールについても、同様の傾向があることが示唆されたと考えられる。

本研究の結果は、調査で取り上げた家族のルールの内容が生活習慣やしつけに関するものが多かった点で限定的である。家族のルールには他にスマートフォンやインターネットの利用に関するものやお金に関するもの、緊急時のルールなどがあると考えられる。また、本研究では、家族のルールが設定されているかについては調査したが、そのルールの必要性についての意識や、そのルールが実際にどの程度、守られていたのかについては調査していない。今後は、これらのことについても検討していくことが課題であると考えられる。

引用文献

草田寿子・岡堂哲雄　1993　家族関係査定法　岡堂哲雄（編）　心理検査学　垣内出版　573-581

Olson, D. H., McCabbin, H. I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. 1985 Family Inventories. St. Paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota.

鈴木久美子・小川俊樹　2000　家族凝集性からみた家族アセスメント尺度：展望　筑波大学心理学研究　第22号　227-234

千葉直子・関　良明・堀川裕介・橋元良明　2014　青少年の安全なインターネット利用を実現する家庭の取組みに関する考察　情報処理学会論文誌　Vol. 55, No, 1. 311-324